

山

形原酒田港から船で1時間半。酒田市の北西約40キロメートルに位置する飛鳥は、タブ

の木が自生する北限であり、手つかずの自然が残る中、過疎化が進む「離島」だ。

3年前から、あるときは学生を連れて調査に、またあるときは市民グループの人たちと一緒にゴミ問題を考えるために、飛鳥に足繁く通っているのが東北公益文科大学専任講師の呉尚浩さん。

「飛鳥には、日本の漁村の原型のような集落が存在しているんです。西海岸には、何一つ人工物のない風景も広がっていて、学生たちも鳥に行くと『元気になる』と言います。ひとの中に眠っている野性の部分を直感的に呼び起こす。そんな島な

飛鳥から見えてくる地球環境問題を発言

Photo:Shigehiko Yoshizaki



東北公益文科大学の共同研究室で学生たちと

んです」

公益学や環境社会学の立場から「地域の多様な住民が協働して、自然を循環的に利用しながら保全」するための研究が専門で、里山保全がそのメインテーマ。人と自然のつながりのあり方を研究し、学生に教える中、その実

呉尚浩さん・東北公益文科大学専任講師 Go Naohiro

1966年、横浜生まれ、名古屋育ち。慶応義塾大学経済学研究科後期博士課程修了後、日本輸出入銀行海外投資研究所では途上国の発展と貧困問題を、東京大学大学院農学生命科学研究科では森林保全を研究。その間、長野での環境教育キャンプ、神戸震災ボランティアなどの活動を実践し、屋久島にも滞在。2001年4月、東北公益文科大学の開学と同時に着任。公益学、環境学を専門とし、山形県庄内地方の土地柄を生かしたフィールドワークに取り組む。鶴岡市在住。趣味はクラシックピアノ、写真撮影や自然散策。

島の海岸には国内はもとよりハンゲル文字の空き缶やペットボトルを始め、冷蔵庫や漁網、建築資材まであらゆるゴミが漂着している。小さな島から私たちの生活を問う直す向こうに、地球規模の環境問題が見えて来

るんです」
そんな調査結果を論文にするだけでなく、ゼミ生と
解したもので、「生きる知恵」にあふれているものなのかが分かります。一方で、
島の海岸には国内はもとよりハンゲル文字の空き缶やペットボトルを始め、冷蔵庫や漁網、建築資材まであらゆるゴミが漂着している。小さな島から私たちの生活を問う直す向こうに、地球規模の環境問題が見えて来



呉ゼミの学生が飛鳥の住民に聞き取り調査。回を重ねるたび、学生が積極的になるよう

践フィールドの一つを飛鳥に求めているというわけだ。酒田市から、「離島振興計画」策定のための基礎調査も依頼され学生ともども参加。

「鳥の人たちにお話を聞くと、漁師さんの生活が、いかに自然の仕組みを深く理

夢あり 人あり

◎東北人インタビュー

共に小学校の総合学習に参加し、市民グループや行政と共に、島をクリーンアップするイベントを開く。今夏は飛鳥を舞台に漂着ゴミ問題を考える全国的イベント「離島ゴミサミット」も共催した。

今年から、学生と共に飛鳥に家を借り

たのは、「ゴミ問題をきっかけにして生まれた新たな人の交流と協働の輪を、今後の鳥づくりにプラスに転

化させたい」との思いから。島の魅力を、他所から来る人たちに伝えるために、ボランティアガイドやガイドブックづくりも開始。写真展も行った。

もとは経済学を専攻したが、経済優先の社会から生じる歪みに目が向き、学究生活の傍ら、名古屋の里山保全運動などの市民活動に参加。東京の大学で非常勤講師を務めるうちに、「地方の大学で、より自然とかわりながら学ぶ場を持ちたい」という思いが膨らんできた。そんなときに、東北公益文科大学から声がかかり、「迷うことなく着任して、本当に良かった」と振り返る。



今夏も、NPO、行政、島民等と連携して「第3回飛鳥クリーンアップ作戦」を開催した